

〔萬葉集春相聞〕寄花

春去者ハルサレバ宇乃花ウノハナ具多思タシ吾越之ワゴエシ妹我垣間者イモガカキマハ荒來鴨アラニケルカモ

〔堀川院御時百首和歌夏〕五月雨

藤原基俊

いとゞしく賤が庵のいぶせきに卯花くたし五月雨ぞふる

五月雨

〔類聚名義抄七〕五月雨サミタレ

〔書言字考節用集乾二〕送梅雨サツメ五月雨サミタレ也續博物志俗以五月雨五月雨也

〔倭訓栞前編十〕さみだれ 送梅雨をいふさはさ月也みは雨也たれは下るなりよて五月雨と書

りといへり一説に万葉集にさみだれとよめる歌一首も見えず菅家万葉集に沙亂と書せたま

へり沙は音をかれり五月の雲はよのつねならず亂れちるをもていふにやともいへり源氏に

も風雨を空のみだれといふめり

〔古今和歌集三〕寛平御時ささいのみやの歌合のうた、きものともり

さみだれに物思ひをれば時鳥夜ぶかく鳴ていづち行らん

〔撮壤集上天像〕雨 晩立ミラダチ夕立

〔書言字考節用集乾二〕涑雨ソウ月暴雨ツキノヒコシ爲涑雨江東呼夏 白雨 暴雨 晩立同俗

〔倭訓栞前編三十五〕ゆふだち 夕に雲發て雨ふるをいふよて拾遺集に夕だちやあめもふる野

の末に見てとよめり五色線に夏雨曰錦雨と見えたり涑雨ともいへり白雨をよめるは心得が

たし俗に馬の脊をわかつといふは五雜俎に龍於是時始分界而行雨各有區域不能相踰故有咫

尺之間而晴雨頓殊者龍爲之也と見えたり

〔萬葉集十〕詠露

暮立之雨トクダチノアメ落毎ノコト春日野之尾花之上ノシラフユ乃白露所念ホシ